

■長谷川利行 洋画家、歌人。大震災体験歌集自費出版後、木賃宿転々、下町の底辺描き、孤独のうちに早世した。

はせがわとしゆき

足尾鉋毒始・1891＝ 京都府久世郡淀下津町(山科)で、伏見警察署署員長谷川利其の三男に生まれる。祖父は俳句をたしなみ、維新前は、淀藩に召抱えられていた。長兄は既に夭折。

日清戦争始・1894＝ 3歳：

早くから書物に親しんで、文人肌の父から溺愛されて育つも、のち、父母・兄弟のことは一切語らず、

ピアノ/国産化・1900＝ 9歳：

田中正造直訴1901＝10歳： 写生大会で藤島武二から画紙を貰ったり、鹿子木孟郎に指導を受け、おそらく、この年、大下藤次郎が出版してブームを起こす「水彩画之菜」にも接し、崇拜するようになったと考えられる。

日露戦争終・1905＝14歳：

韓国反日暴動1907＝16歳： 淀下津の高等小学校を卒業し、祖父の縁か、浜口梧陵が創設した稽古場をルーツとする和歌山県湯浅の耐久中学校に入学。この年、母が死去。_師について水彩画を学び、詩歌にも親しんで、才能を発揮、

アヲヲ^テ創刊・ 1908＝17歳： 中退し、_以後、{みづゑ}の熱心な読者として、水彩画を描き、投稿、

伊藤博文暗殺1909＝18歳：

韓国併合・・・1910＝19歳： _{みづゑ}に「おのれの告白」という文も寄稿。大下藤次郎から年賀状を貰い感激するが、

大逆事件判決1911＝20歳： この年、大下藤次郎が急逝すると、以後、水彩画から離れるとともに、足跡も消える。

明治天皇没・1912＝21歳：

第一次大戦始1914＝23歳： 兄が死去。

本格政党内閣1918＝27歳： 弟が死去。

ベルサイユ条約・1919＝28歳： *{講談雑誌}の短歌欄に投稿して、選者生田蝶介を瞠目させて、特選の常連となり、それら作品をまとめた歌集「本草集」を自費出版。

大暴落・・・1920＝29歳： _{講談雑誌}で特別扱いを受けるうち、上京して、生田蝶介に入門するが、なじめず、同門者との確執の上、師を批判して、訣別し、

原歌首相暗殺1921＝30歳： 絵画制作をはじめめる。

関東大震災・1923＝32歳： *関東大震災に遭遇し衝撃を受ける。勤労奉仕をして過労で寝込んだ後、体験を詠んだ歌集「大火の岸に距たりて歌へる」を自費出版し、個人雑誌{火岸}を発行。新光洋画会展に「田端変電所」を出品して初入選。

円本時代始・1926＝35歳： _帝展に「廃道」が入選、二科会にも「田端変電所」が入選、

金融恐慌・・・1927＝36歳： *「麦酒室」「酒売場」「鉄管のある風景」などを出品して二科展樽牛賞を受賞。父の紹介でヤマサ醤油当主浜口儀兵衛に買い上げて貰い、国粋会大親分梅津勘兵衛の肖像画を描いてポンチ絵とどなられながらも可愛がられるなどするが、この頃から、終生住みついた下町の底辺を描きつつける。

共産党事件・1928＝37歳： _当代一流画家が発起人の{第一回大調和展}に20点応募するも、落選すると、{反大調和展}を開催し、美術雑誌に批判の檄文を寄稿。この年、前田夕暮に出会い、以後、半ば強引にその援助を受ける。

世界恐慌・・・1929＝38歳： _「地下鉄道」「瓦斯会社」「Y氏像」で{一九三〇年協会}奨励賞をうけ、二科展にも出品、

海軍軍縮条約1930＝39歳： _独自の画風を確立し、「岸田国土の像」「ナチュラル・モルト」などを二科展に出品、

満州事変・・・1931＝40歳：

国際連盟脱退1933＝42歳： _目的不明の{超々(シュルシュル)会}をつくり、下町芸術家や演芸人・不良らと定期的に集まって騒ぐ。

芥川直木賞始1935＝44歳： _二科展に黒一色の大作「鋼鉄場」を出品し、久米正雄から絵ではないと批判されるも、二科会への執着を見せるが、生活は貧窮をきわめ、飲酒にふけり、場末の木賃宿を転々としていたために嫌われ、会員はおろか会友にもなれず、ついには受賞の機会もなくなって行き、

二二六事件・1936＝45歳： _高碕正男が長谷川を売出すべく開設した天城画廊で、翌年かけ、立続けに15回個展を開き、

日中戦争始・1937＝46歳： _さらに、新宿・池袋・銀座の喫茶店でも、度々古典を開くが、高碕の支配を嫌って喧嘩別れ、なお、二科展に「夏の女」「ハルレキン」を出品するが、

健保+総動員 1938＝47歳： *自ら評価するも翌年には夭折する手塚一夫と奇妙な同居をし、無縁飲食で留置されて東郷青児に助けられ、ついに二科展には出品せず、一水会に「ノア・ノア」などを出品。父が死去するも、葬儀に行けず、

第二次大戦始1939＝48歳： _胃を病むとともに、友人らとも疎遠になり、

大政翼賛会・1940＝49歳： _長谷川の絵を見て衝撃を受けた天城俊彦と出会うも、東京市板橋養育院で、孤独のうちに没した。

没後、天城俊彦は、わずか1年半の間に、25回もの長谷川利行展を開催する。